

「破鏡」は「半鏡」に非ず

—源光行『百詠和歌』第一「分暉度鵲鏡」注を中心として—

白クラ
雲ウネヒ
飛

はじめに

「分_レ暉度_ニ鵲_一鏡」は『李嶠百詠』に見られる詩句である。これについて源光行（一一六三—一二四四）が『百詠和歌』第一の「月」の条に、「月の一の名に破鏡と云。光を分かつとは月の虧はじめむるなり。昔女おとこありけり。世の乱れにあひて。別れて遠き國へ行く時。鏡を割りて片鏡づゝ取て。形見として去りぬ。この女心ならず夫してけり。時に片鏡鵲になりて遙かに飛びて。おとこの鏡と一になりぬ。おとこ哀れと思ひ知りぬ。後の人鏡を鑄て裏に鵲をうつせり。このことは鄭の人曹文といへり。（へたてこし昔の影も歸きてあひみる月のかゝみなりけり）」「析尾武編『百詠和歌注内閣文庫蔵百廿詠翻字内閣文庫蔵百詠和歌影印』（汲古書院、一九七九年）による。」と注和歌を付している。注にいう「鄭の人曹文」の故事は、『西京新記』『本事詩』『太平御覽』『綺語抄』『注好選』『今昔物語集』などに見えるいわゆる「破鏡」説話である。

「破鏡」説話とは、離れて暮らさなければならなくなった夫婦が、鏡を割ってそれぞれの一片を持ち、再会のために証とする。よって、中国の場合には、『本事詩』のように、その鏡のお陰で再会・復縁を果たした所謂「破鏡重圓」型と『太平御覽』のような、女がほかの男と結婚したため、女が持っていた半分の鏡が鵲になって、男のところへ舞い戻り、女の不義を知らせたという類の夫婦離縁型がある。日本の場合も中国と同様、二つの型の話が伝わ

っているが、『唐物語』のような、比較的忠実な翻訳説話類以外は、離縁型の方が多く見られる。

日本と中国のこれらの話では、度々「破鏡」「半鏡」「半照」などが混在して使われている。日本の現行の注釈類でも、この「半鏡」と「破鏡」がしばしば同義語として使われているが、妥当とは言えない。何故ならば、「破鏡」が源光行の言う月の一名とすれば、月の満ち欠けの特徴に従わなければならないからである。李嶠の原詩にも月の形について言及しているので、その鏡のような月は、月の自ら持つ満ち欠けの特徴によって、いろいろな割れ方を見せるのである。すなわち、鏡としての「半鏡」や「半照」、日本語で言う「片割れ鏡」はみな「破鏡」の範疇に入るものと考ええる。何故なら、これらを月に喩える場合には、その形は上弦の月あるいは下弦の月の形になるからである。だから、月の満ち欠けという天文的現象に従って、「破鏡」というのは月の満ち欠けに準じて新月、満月（望月）、晦以外は、みな「破鏡」であることが言える。三日月や「半鏡」、それ以外の割れた形はすべて当てはまるのである。「半鏡」というのは上弦や下弦の時の月の形にすぎないのである。「破鏡」の中には、「半鏡」すなわち満月の半分も含まれているし、ほかの形も含まれているのである。逆に「半鏡」は「破鏡」を含みきれないのである。しかし、「破鏡」とは、鏡、月だけに使われているのではなく、『太平御覽』に記載しているように、「漢書郊祀志曰…古者天子常以春秋解祠、祠黄帝用一梟破鏡。」〔『漢書』郊祀志に曰く…古は天子常に春秋を以て解祀す。黄帝を祀るには、一の梟と破鏡とを用い〕、この箇所「破鏡」については、「獸名、食父。黄帝欲絶其類、使祀皆用之。破鏡、如羆而虎眼」〔獸の名、父を食す。黄帝其の類を絶せんと欲するに、祀に皆之を用いせしむ。破鏡は、羆の如き虎の眼〕と孟康の注が付されている。「破鏡」は父を食うという獸だから、祭祀の時にみなこれを用いるのは、その類を絶滅させるためであるという、もともと『史記』に記載された獸の名前である。漢・太史令司馬遷撰『史記』

古者天子常以春秋解祠、祠黄帝用一梟破鏡。

集解・孟康曰、梟、鳥名。食母。破鏡、獸名。食父。黄帝欲絶其類、使百物祠皆用之。破鏡、如龜、而虎眼。

吉田賢抗『史記』二（本紀）（新釈漢文大系39、明治書院、六九六頁）は「破鏡は父を食うという獸。祭祀にこれを用いるのは、その類を絶滅せんがためであるという。一説に破鏡は破れ鏡という。」と注釈している。

古 いにしへ は天子 てんし、常 つね に春秋 しゅんきゅう を以て解祠 かいし す。

黄帝 くわうてい を祠 まつ るには、一 いつ の梟 けう と破鏡 はきやう とを用 もち ひ

『史記』は「史家の絶唱」とされる書物で、文人たちの基本的教養書のひとつに数えられるものとして、源光行がこれを知らないとは考えにくいので、源光行が李嶠の詠物詩「月」と無関係だから、敢えて言わなかったのだろう。一方、「破鏡催_ニ歸客_一」、殘陽見_ニ舊山_一」のように、月を喩える場合の「破鏡」は、「半輪殘月」として理解されるも、明・馮惟訥『古詩紀』に「古辭云…藁砧今何在、山上復有_レ山。何當大刀頭、破鏡飛上_レ天。藁砧、砧也。謂_レ夫也。山上有_レ山、出也。大刀頭、刀上鑲也。破鏡、言半月當還也。」とあるように、一月の半分、時間の「半月」のことと理解することもできる。

また、「半鏡」は明・曹學佺『石倉歷代詩選』卷九十六「拆釵伴_レ妾埋_ニ青塚_一」、半鏡隨_レ郎葬_ニ杜郵_一」にあるように、具体的な女子用の化粧道具としての鏡も指すが、『御製詩初集』卷十七に「古今體九十九首・弦月」所収の詩に

「塞天懸半鏡」とあるように「弦月」のことも示す。

拙稿は、日中の文献に基づいて、「破鏡」「半鏡」が使われている文脈を区別しながら、用例を収集・分類し、「破鏡」の天文学的実態、かつ暦の言い回しの使い方と「半鏡」の具体的道具として扱われる一面を、説話・詩話乃至和歌のそれぞれの側面から考察するものである。

第一章 「破鏡」とは

一、源光行について

源光行（一一六三～一二四四）、平安末期～鎌倉前期の歌学者。『蒙求和歌』『百詠和歌』『新樂府和歌』（散佚）の三部作をなす。山脇毅「源光行一家年譜」（『源氏物語の文献学的研究』創元社、一九四四年）、栃尾武『百詠和歌注』『書誌』、小山順子『蒙求和歌』『百詠和歌』の表現——歌人としての源光行——（『京都大学國文學論叢』二〇一六年、35：1-21 <http://dx.doi.org/10.14989/210391>）などに紹介されている。このうちでは省略する。『百詠和歌』については、『日本古典文学大辞典』第五卷（岩波書店、一九八四年、一八四頁）に「百詠和歌ひやくえいわか十二卷二冊。和歌。鎌倉時代の翻案歌集。源光行（みつゆき）作。元久元年（一二〇四）成立。『蒙求和歌』及び『樂府（がふ）和歌』（散佚）とともに三部作をなす。一説に、將軍源実朝に献上されたものかという。」とある。『群書解題』第十^②、乾克己「十訓抄と文鳳抄・百詠和歌」^③、池田利夫『日中比較文学の基礎研究翻訳説話』とその典拠^④などに紹介されている。本文中に栃尾武『百詠和歌注』（汲古書院、一九七九年）と胡志昂・山部和喜・中村文・山田昭全『百詠和歌』注釈（二）（『埼玉学園大学紀要（人間学部篇）』第8号、二〇〇八年十二月）の注釈を比較検討し、元来の唐・張庭芳注と源光行が施した注釈との比較も行い、源光行の注の含意を探る次第である。まず

月の別名から論を進める。

二、月の名

源光行は「月の一の名に破鏡と云」という見解で、月の別名をもって、「月」を説明しようとしている。月の別名は古くから多く存在する。前漢『爾雅』「釋天」に

月在甲曰畢、在乙曰橘、在丙曰修、在丁曰圜、在戊曰厲、在己曰則、在庚曰壑、在辛曰塞、在壬曰終、在癸曰極。

〔月は甲に在れば畢と曰い、乙に在れば橘と曰い、丙に在れば修と曰い、丁に在れば圜と曰い、戊に在れば厲と曰い、己に在れば則と曰い、庚に在れば壑と曰い、辛に在れば塞と曰い、壬に在れば終と曰い、癸に在れば極と曰う。〕

とあるように、「十干」、つまり日（月の位置）によって、月の呼び名が変わるということが分かる。また、後漢『釋名』には

月、缺也。満、則缺也。

〔月、缺なり。満ちれば、則ち缺くるなり。〕

とある。これは「同聲相諧」という訓詁の類で、「缺」をもつて「月」を説明することは、「缺」と「月」が古くは近い発音であったことを意味している^⑤。また、唐・白居易『白氏六帖事類集』月第四（『白孔六帖』も同）には、以下のように書かれている。

莫羨 晦朔應月而生落

桂華 月中有仙桂樹

蛾眉 纖纖似玉鉤 娟娟若蛾眉、謂初月

破環・破鏡 飛上天、謂殘月

鵲飛 魏武帝歌曰月明星稀烏鵲南飛

右の「破環・破鏡」の見出しの下に、「飛上天、謂殘月」（飛んで天に上り、殘月と謂う）の解釈の注が施されている。このことは何を意味しているのかというと、少なくとも、唐の白居易の時代にはすでに、「破鏡」という言葉で月を表現していたことを示している。さらに、白居易は日本の歌人たちに愛された詩人のひとりであるから、源光行が白居易が書いたこの書物を見ていないとは考えにくい。そこで、『百詠和歌』第一、「月」の条の「分^レ暉^度鵲^二鏡」に対する源光行の注釈を見てみよう。

三、源光行が「分^レ暉^度鵲^二鏡」に加えた注釈について

月の一の名に破鏡と云光をわかつとは月の虧

はしむるなり昔女おとこありけり世のみたれ
にあひてわかれてとほき國へゆくとき鏡をわ
りてかた鏡つゝとてかたみとしてさりぬこの
女心ならず夫してけり時にかたかゝみかさゝ
きになりてはるかにとひておとこのかゝみと
一になりぬおとこあはれとおもひしりぬ後の
人鏡をいてうらにかさゝきをうつせりこのこ
とは鄭の人曹文といへり

へたてこし昔の影も歸きてあひみる月のかゝみ
なりけり

右は、栃尾武編『百詠和歌注（内閣文庫蔵百廿詠翻字・内閣文庫蔵百詠和歌影印）』（汲古書院、一九七九年）の百
詠和歌影印による翻字である。分かりやすくするために、さらに筆者により、清濁句読点を施し、適宜漢字を宛てたも
のを左に掲げると、次のようになる。

月の一の名に破鏡と云。光を分かつとは月の虧はじむるなり。昔女おとこありけり。世の乱れにあひて。別
れて遠き國へ行く時。鏡を割りて片鏡づゝ取て。形見として去りぬ。この女心ならず夫してけり。時に片鏡
鵲になりて遙かに飛びて。おとこの鏡と一になりぬ。おとこ哀れと思ひ知りぬ。後の人鏡を鑄て裏に鵲をう

つせり。このことは鄭の人曹文といへり。

へたてこし昔の影も歸きてあひみる月のか、みなりけり

右の内容は、源光行が『李嶠百詠』乾象十首の「月」の詩に加えた注釈である。李嶠のものと詠物詩「月」の詩を左に示すと、以下のようなものである。

桂生三五夕〔桂は三一五の夕べに生る〕 桂生一作滿 三一五夕

莫開二八時〔莫は二一八の時に開く〕

莫開一作分 二一八時

分輝度鵲鏡〔暉を分ち鵲の鏡を度る〕

分輝一作暉 度 鵲鏡一作飛鵲鏡

流彩入蛾眉〔彩を流し、蛾眉に入り〕

流彩一作彩 入 蛾眉一作新影學蛾眉

皎潔凌踈牖〔皎潔たる踈牖に凌む〕

皎潔凌 踈牖一作臨

朦朧鑿薄帷〔朦朧たる薄帷を鑿く〕

朦朧 鑿 薄帷一作靜

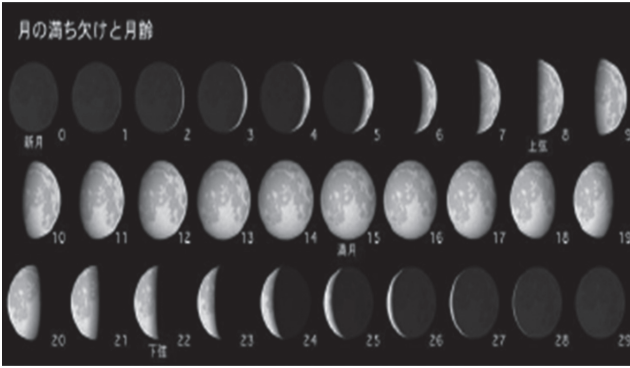
願陪北堂宴〔願くは北一堂宴を陪む〕

願陪 北一堂宴一作願言從宴客

長賦西園詩〔長く西園の詩を賦す〕

長賦 西園詩一作清夜幸同燼

李嶠は詠物詩の中に「月」の形を詩句「桂生三五夕」「莫開二八時」「分輝度鵲鏡」「流彩入蛾眉」として表現している。つまり、「桂生三五夕」とは、「満月」を意味する。「莫開二八時」とは、「虧け始める」ことを意味する。「分輝度鵲鏡」とは、上弦また下弦の月で、つまり「半鏡」のことである。「流彩入蛾眉」とは、「三日月」のことを言っ



ているのである。画像で見れば一目瞭然であるから、以下に示す「(C) アストロマーツ」<http://zukan.kids.yahoo.co.jp/astro/phenomenon/0005.html>。ただし、形だけではなく、李嶠はそれぞれの詩句の中に、説話や故事、詩話などを巧みに編みこんでいるので、後世の注釈者にいろいろな思いを馳せさせたことが想像できる。そこで、唐・張庭芳注のそういう一面が見られる注釈に注目したい。

第二章 張庭芳の注について

一、張庭芳注の内容について

【唐】李嶠撰、張庭芳注、胡志昂編『日藏古抄李嶠詠物詩注』（海外珍藏善本叢書）（上海古籍出版社、一九九八年、六頁）に張庭芳注の内容が以下のように書かれている。

老，壯莫莫，生一庭，從，開，至，十五，日，
 生，一，葉，從，十，六，日，落，一，葉，也。
 此，中，昔，有，走，婦，持，別，打，鏡，破，方，執，一，片，以，為，信，其
 妻，以，人，和，通，其，片，鏡，化，為，飛，鵲，至，夫，亦，走，乃，知，之。
 後，人，鑄，鏡，因，方，流，影，入，蛾，眉，題，明，遠，龍，目，託，皎，潔，
 對，安，背，上，也。

右の内容を以下に示すと、次のようになる。

神異記曰…昔有夫婦將別打鏡破、方執一片、以為信。其妻与人私一通、其片鏡化為飛鵲至夫前、夫乃知之。後人鑄鏡因為鵲安背上也。

右の内容を源光行のそれと比較して見れば、次のようになる。

【張庭芳と源光行の注の比較(表一)】

張庭芳注	源光行注
	月の一の名に破鏡と云光をわかつとは月の虧はしむるなり
神異記曰	
昔有夫婦	昔女於とこありけり
將別	世のみたれにあひて わかれて とおき國へゆくとき
打鏡破方執一片以為信	鏡をわりてかた鏡つゝとてかたみとしてさりぬ
其妻	この女
与人私、通其片鏡化為飛	心ならず 夫してけり時にがたかゝみかざゝきになり てはるかにとひて
鶴至夫前	於とこのかゝみと一になりぬ
夫乃知之	於とこあはれとおもひしりぬ
後人鑿鏡因為鶴安背上也	後の人鏡をいてうらにかざゝきをうつせり このことは鄭の人曹文といへり

右の「表一」を見れば分かるように、源光行は張庭芳より大幅に注釈を加えたことが分かる。内容からすると、張庭芳が言う「神異記」のことに触れていない。その代わりに、出所は「鄭の人曹文」とする。この「鄭の人曹文」の話は日本にしか見られないと考えられる「破鏡」説話の代表的な鵲が鏡の裏に鑄造される由来談の一類型である。代表的なテキストとしては『綺語抄』を挙げる事ができる。

二、『綺語抄』における「破鏡」説話譚

藤原仲実（一〇五六～一一一八）撰『綺語抄』中、院政期歌学書。三卷。康和四年（一一〇二）～元永元年（一一一八）の間の成立。久曾神昇『綺語抄』（『日本歌学大系』別巻一、風間書房、一九五九年、七六頁）に左のように書かれている。

のもりのかゞみ

むかし曹文と云ける人ありけり。おほやけにつかまつりて仰をうけ給りて、み中へくだりけるが、ぎのかたをうらにいつけたりけるかゞみを、中よりわりて、かさゝぎのはねをこなたあなたにつけて、かたかたをばめにとらせ、いまかたかたをばおのれもちて、女のをとこせん事は、このかゞみにてしらん。我もをんなせん事は、このかゞみにてしれとちぎりて、めを京におきてくだりたりけるに、まづをんなのをとこをしたりければ、このかさゝぎのかたはねつきたるかゞみはるかにとびて、曹文がもたりけるかたにつきにけり。それを見て、ちぎりがへてをとこしてけりとなんしりにける。

日本紀に委はあり。

右の内容について、『袖中抄』第十八の中にある『綺語抄』に関する話と合わせて考えたい。

○又野守鏡トハ徐君ガ鏡也。

○又綺語抄ニハ曹文ガ破鏡ノ事ニテ釈シタリ其ハ鵲鏡也ハシタカノ、モリノカバミトイフベカラズ

「のもりのかゞみ」とは、「徐君ガ鏡」のことだとする。「徐君ガ鏡」というのは、前に触れた『両京新記』『本事詩』『太平広記』などにみえる徐徳言と楽昌公主の「破鏡重圓」型の話である。そして、「鵲鏡」というのは、おそらく、『太平御覧』などにある話を指しているだろう。ただし、『太平御覧』を見たかどうかはまだ不明である。先に見た張庭芳注の内容を知っている可能性は高いと筆者は思う。何故なら、李嶠の詩は、日本に伝来以後、幼学書のひとつとされていたので、張庭芳の注も注目されたのではないかと推測されるからである。すると、「徐君ガ鏡」の故事を源光行は承知の上で、出所を「鄭の人曹文」にしたのかも知れない。それより、月に関して、「破鏡」を用いて説明する源光行が一体何を考えていたかを探ってみたい。

第三章 「破鏡」としての月に関する考察

一、『玉台新詠』における「破鏡」について

『漢詩名句辞典』^⑥に「古絶句四首（其一）」の『玉台新詠』五絶に「破鏡」という言葉がみえる。左に示す。

藁砧今何在 山上復有山 何當大刀頭 破鏡飛上天

同書に次のようにルビを振っている。

藁砧こうちんいまいづ今何いまくにか在る

山上さんじょう復やまた山有り

何かいつ当まさに大だい刀とうの頭かぶなるべき

破鏡はきやう飛とんで天てんに上のぼる

右の詩については、はじめにも触れたように、明・馮惟訥『古詩紀』に「藁砧、砧也。謂夫也。山上有山出也。大刀頭刀上鑽也。破鏡言半月當還也。」と解釈したように、「破鏡」は時間のこと、「半月」を指している。しかし、この詩の中にある「破鏡飛上天」という一句は、前掲した唐・白居易『白氏六帖事類集』月第四（『白孔六帖』も同）にも見られるので、この古絶句はある種の「戲訓」だが、唐の白居易の『白氏六帖事類集』にある「破環・破鏡・飛上天、謂残月」は明の馮惟訥『古詩紀』にあるような謎解きの形でなく、「月」の形だけに止まる説明になっている。すると、もし源光行がこれを読んだとしたら、「破鏡」は「残月」と思うだろうか。それを分かる由がなくても、「分わけ暉き度ど三さん鵲かく鏡きやう」に加えた注釈であるから、また、源光行が続けて鵲が鏡の裏に鑄られる由来譚を述べることからすると、その鏡の形は「残月」とは言え、半月の形として意識されたのであろう。つまり、この類の話の中に出てくる「半鏡」「半照」とは、月の「満月」にちなんで、「圓」を求める、ちょうど上弦のような形の、二つに割った半円形の形であると考えられる。

二、「半鏡」と月と夫婦観

宋・華鎮撰（『雲溪居士集』卷十三「弦月」の詩に、「半奩」という言葉がある。「半鏡」と同様に考えるので、例として左に示す。

人間離別最堪憐

天上嫦娥恐亦然

昨夜廣寒分破鏡

半奩飛上九重天

また、『御製詩初集』卷十七に「古今體九十九首・弦月」所収の詩に「塞天懸「半鏡」とあるように「弦月」のことも示す。月だけでなく、明・曹學佺『石倉歷代詩選』卷九十六にあるように、「拆釵伴「妾埋「青塚」、半鏡隨「郎葬「杜郵」とは、具体的な女子用の化粧道具としての鏡も指す。

むすび

以上、鏡としての「半鏡」や「半照」、日本語で言う「片割れ鏡」はみな「破鏡」の範疇に入るものと考えられる。何故なら、これらを月に喩える場合には、その形は上弦の月あるいは下弦の月の形になるからである。だから、月の満ち欠けという天文的現象に従って、「破鏡」というのは月の満ち欠けに準じて新月、満月（望月）、晦以外は、みな「破鏡」であることが言える。三日月や「半鏡」、それ以外の割れた形はすべて当てはまるのである。「半鏡」と

いうのは上弦や下弦の時の月の形にすぎないのである。「破鏡」の中には、「半鏡」すなわち満月の半分も含まれているし、ほかの形も含まれているのである。逆に「半鏡」は「破鏡」を含みきれないのである。つまり、「破鏡」は「半鏡」に非ず、ということである。

〔注〕

- ① 漢・司馬遷、唐・司馬貞素隱、唐・張守節正義、宋・裴駰集解『史記』中華書局、一九五九年、第二冊、卷八、卷十五、四五六頁。
- ② 『群書解題』第十、續群書類従完成会、一九六一年、三四頁。
- ③ 乾克己「十訓抄と文鳳抄・百詠和歌」『金沢文庫研究』第一五卷第二号（通卷一五四号）、中島印刷所、一九六九年。
- ④ 池田利夫「日中比較文学の基礎研究」（附説話）笠間書院、一九七四年。
- ⑤ 拙論「魄」の形について——月相表現を中心に——（『形の文化研究』、形の文化会、第八卷一号、二〇一四年、二頁）に詳しく言及している。
- ⑥ 鎌田正・米山寅太郎『漢詩名句辞典』大修館書店、一九八〇年、一九二頁。

* 討論要旨

小山順子氏は、本発表のねらいとは源光行『百詠和歌』とその原典である『李嶠百詠』の対応関係を明らかにすることであったのか、と確認した。発表者は、光行による注が張庭芳の『李嶠百詠』注を専ら参照しているという仮説に基づいて両者の対応関係を調べたところ、「月の一の名に破鏡と云」という一文に関しては光行が新たに付け加えたことが明らかになったため、この一文は光行が李嶠の記述の全体に対して付した注であると考えようになった、と研究の経緯を説明した。小山氏は、中国の漢詩は日本の和歌とは異なり、基本的に月といえば満月を指すのだから、少しでも欠けていれば「破鏡」という、と理解してもよいのではないかと質問した。発表者は、光行が李嶠の原詩にもなかった「破鏡」という言葉によって何を表そうとしたのか明らかにするためには、「半鏡」「半照」などとの意味の違いをさまざまな用例に基づいて検証する必要があると、と本発表の意義を主張した。